

エッセイ
教育再生から
国家再生へ!
3

今を生きて在る幸せを 学生に与えよう

私は日本のごく平均的な私立大学の学長を務めて6年目に入っている。私が学長職に相応しいのかどうかは別にして、私にとってはどう考えても人生最後の仕事である。引き受けた以上、満身の力でやり遂げねば「蓋棺」ならじと思ひ、有志で集めて策を練り、大学改革5年を貫いた。たかが5年で100年以上の伝統をもつ大学を変えらることなど容易ではないが、次代の改革への道筋はつけたという自負はある。

私の胸中をつねに満たしてきたのは、「成熟の時代」といわれ「ポストモダン」といえば響きは麗しいが、実際には躍動感に乏しく混沌たる価値観の現代を生きる若者たちに、少しでも今を生きて在ることの晴れがましさを実感させたい。その実感こそが若者の成長の源泉になるはずだという想いである。

私は学生にアジアの貧困国での現地体験を在学中に少なくとも1度は

させ、これを単位化することを試みてきた。現在の若者は生活に窮するということはずくない。それゆえであろう、何か世のためにやりたいという気分は私どもの青春時代より強い。しかし何をやらねばいいのか、この「暖衣飽食」の日本の中では見えてこないのである。

フィリピンの信頼できる現地NGOと組んで、学生にホームステイをさせ、NGOの指導の下でストリートチルドレンの救済活動に参加させたり、スモークマウンテンと呼ばれる巨大なゴミの山で空き缶やビニール袋を拾って親の生計の糧にしている子供たちが、麻薬など悪の道に迷い込まないよう子供会を組織するためのお世話をさせる。そういった活動に1ヵ月ほど携わらせ帰国した彼等の顔には、自分以外のことに何がしかの貢献ができたのだという晴れがましさが見られる。

インドネシアの姉妹校と「協働」し

て、その姉妹校に隣接する貧困地域のコミュニティ・デベロップメントに両校の教員と学生の参加を得て、自治会の組織づくりに精出させたりもした。このプロジェクトの中で日本の学生が姉妹校の学生からインドネシア語を学び、姉妹校の学生が日本の学生から日本語を学ぶという「副産物」も生まれた。このプロジェクトはJICA（独立行政法人 国際協力機構）の「草の根技術協力事業」に取り上げられ、年間1,000万円の支援を3年にわたって受けるという幸いにも恵まれた。

現在では日本の若者の2人に1人は学生である。私の長い教員生活の実感からすれば、大学生の学力低下は疑いようがない。私はこのことを嘆いているのではない。むしろその逆である。望む者のすべてが大学に進学できるといふ夢のような時代がやってきたのだから、これは慶賀すべきことである。高等教育の大衆化である。大学が大衆化したのであれば、学生の学



一般財団法人
日本教育再生機構理事長
拓殖大学学長

渡辺利夫

力もまた「大衆化」するのは理の当然である。大学の「大衆化」見合うよう、学部や学科の再編、カリキュラムの改変、シラバス（教授科目細目）の充実、学力に適合的なテキストづくりなどに取り組みべきは当然のことである。しかし、それだけで十分ではない。学生たちを「今を生きて在ること」の晴れがましさに見舞わせるためには、そのために自分自身が手を差し伸べるべく、うと思わせるような環境に彼らを導くことが重要だと思う。貧困国の「現場」での体験を必修化する本格的な教養体系を実現したいという目下奮闘中である。

日本教育再生機構

2006年10月22日に結成された民間の教育団体。教育や子育ての問題に取り組む団体。ゆるやかなネットワークをつなぎ、日本の教育再生に取り組む。教科書や教材の研究・開発、教育問題についての調査・提言など、教育再生に向けたシンクタンクとして活動を展開している。

<http://www.kyoiku-saisei.jp/>